

●聖書の時代、イスラエル社会は男性優位でしたが、信仰に満ちた女性たちの姿も描かれています。その中の一人が「カナンの女」です。その信仰深さは、①彼女がイエス様を「主よ」と呼んだこと、②娘がイエス様に触れずに癒された遠隔治療の奇跡を体験したこと、③イエスとの論争に勝ったこと、によって印象深く語られています。

●この名前も出てこない「カナンの女」は、悪霊に取り憑かれた娘の癒しを切望してイエス様に願いました。しかし、イエスは「子どもたち（ユダヤ人）にまず与えるべきで、子犬（異邦人）に与えるのは良くない」と応じました。「小犬」は異邦人を指していましたが、軽蔑的な「犬」とは異なり、親しみを込めた表現とされています。それでもイエス様は一度、彼女の願いを退けたのです。

この時、彼女は怒らずに「小犬も子どもたちのパンくずをいただきます」と答えました。この謙虚で揺るぎない信仰と機転ある返答に、イエス様は「その言葉で十分である」と応じ、娘の病気は癒されました。彼女は異邦人という立場に引け目を感じることなく、凜とした態度でイエスに助けを求め続け、その信仰が奇跡へと繋がったのです。

●アメリカ初の女性宣教師で、神戸女学院の前身となる女学校を設立したイライザ・タルカット宣教師のエピソードを思い起こします。タルカット宣教師は、女性の地位が低く、その活躍が認められにくい時代にあっても決して屈せず、常に謙虚であり、多くの人々に感銘を与えました。

彼女は、常々女学生たちに「背筋を伸ばしなさい」と語っていました。この言葉は、当時の日本女性が男性の後ろをうつむき加減に歩くのが美德とされた時代にあって、立ち振る舞いを正すだけでなく、精神や信仰においても「神の前に主体として立ちなさい」というメッセージを込めていたのです。

●今日の「カナンの女」は、異邦人という立場に引け目を感じず、イエス様の愛が全ての人に及ぶことを信じて「主よ」と呼び、主体として立ち、助けを求めました。この女性が無名で記されているのは、愛する娘のために苦しむ一人の母親という普遍的な姿を象徴しています。また、「カナンの女（異邦人の女性）」という表現には、当時の偏見や社会的地位の低さが表れています。

今日のお話は、私たちがどんな状況に置かれても引け目を感じることなく、イエスを主と告白し、背筋を伸ばして神の前に主体として立ち、大胆に主に求めなさいと励ましています。主の愛は全ての人間を包む大きな愛であることを信じつつ、私たちも大胆に「主を求めて」歩んで参りたいと思います。